広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	教材から知識を問い直す体育理論の授業研究 : オリ・パラからスポーツのあり方を考えよう
Author(s)	三宅, 理子; 阿部, 直紀; 合田, 大輔; 高田, 光代; 信原, 智之; 藤本, 隆弘
Citation	中等教育研究紀要 ／広島大学附属福山中・高等学校 , 60 : 202 - 213
Issue Date	2020-03-31
DOI	
Self DOI	10.15027/49297
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00049297
Right	
Relation	

教材から知識を問い直す体育理論の授業研究
オリ･パラからスポーツのあり方を考えよう

三宅　理子・阿部　直紀・合田　大輔
高田　光代・信原　智之・藤本　隆弘

オリンピック・パラリンピックの現実にある対立的テーマについて，新聞資料や映像を用いて多面的に話し合うことを通して，人間にとってのスポーツの文化的価値を理解させることを目的として授業を行った。対立的テーマとして，「五輪とパラリンピックの融合」「スポーツと国の問題」を取り上げた。

正解のない問いを話し合うことで，知識＝スポーツの価値やその意義を問い直し，スポーツに対する新たな視点や考え方を見いだし，生徒全員が自分の思考が深まり楽しかったと答えた。ほとんどの生徒が「自分への挑戦」として，あるいは「スポーツを通したコミュニケーション」を楽しむためにスポーツをしていきたいと答え，生徒自身のスポーツへの関わり方を考えることにつながった。

１．研究目的

TOKYO2020 を前に，多様な取り組みが展開され，生徒たちは日々多くのスポーツ情報に接している。この大会のビジョンは，「スポーツには世界と未来を変える力がある」。すべての人が自己ベストをめざし，一人一人が互いを認め合い，そして未来へつなげよう，の３つを基本コンセプトとしている。これらのコンセプトは，生徒たちの日頃のスポーツ活動や身近なスポーツ大会への参加のあり方にも通じるものがある。

一方，メダルの国家間競争，商業主義，招致活動疑惑，ドーピングなど，オリンピック・パラリンピックにかかわる様々な問題があることも事実である。次期学習指導要領が目指す「資質・能力の３つの柱」の１つに「知識・技能」があるが，単にオリンピック・パラリンピックの意義を学んでも，それは生徒たちにとって生きて働く「知識」にはならない。

そこで，新聞を読んでオリンピック・パラリンピックの「今」＝客観的事実を知ることを起点とした学習を行う。その上で，現実にある対立的テーマについて多面的に話し合うことを通して，人間にとってのスポーツの文化的価値を理解させたい。スポーツの文化的教養を持つことは，長い人生を健康で豊かに過ごす大きな原動力となる。生徒自身の将来の問題として，自分のスポーツへの関わり方を考えることにつながる授業のあり方を検討する。

２．研究方法

2.1. 期日および対象

実験授業

2019年10月10日～11月28日の間の６時間

対象：広島大学附属福山高等学校第１学年　女子 58 人

2.2. 研究経過

2.2.1　夏休みの課題「新聞を読んで」

夏休み中の課題として，オリンピック・パラリンピックに関連する新聞記事/Topicを読み,問題点を整理し，人間にとってのスポーツの価値を考えることを課題としてテーマを設定し，レポートを作成した。資料とする新聞記事の期間は７月 10 日から９月１日まで，必ず複数用いレポートに添付することとした。

2.2.2　授業前のアンケート調査

図１は授業前のアンケート調査で「TOKYO2020 に興味がありますか」をまとめたものである。58 人中「とても興味がある」が 25 人，「興味がある」が 20 人で８割近い生徒が興味があると答えている。「興味がない」「全く興味がない」と答えた生徒の中には「運動は苦手，自分とは遠い世界のこと」と感じている生徒もいるようであったが，夏休みにオリンピック・パラリンピックに関連する新聞記事を読み，問題点を整理し，レポートを作成したことで，多くの生徒が授業を好意的に捉える下地は整っていたと思う。

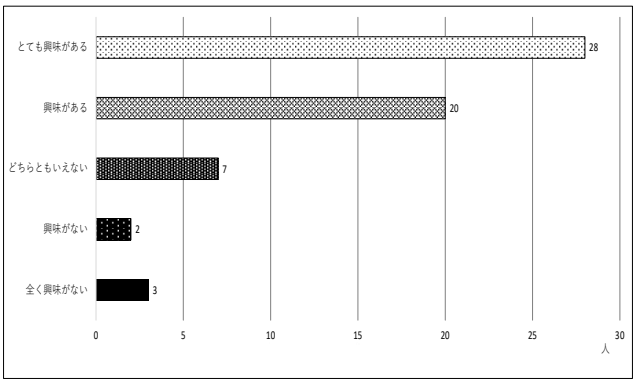

図１　TOKYO2020 に興味があるか

図２は単元前のアンケート調査で「オリンピック・パラリンピックに関するキーワードを知っていますか」(聞いたり見たりしたものも含む）をまとめたものである。TOKYO2020 の大会コンセプト「全員自己ベスト」「多様性と調和」「未来への継承」，オリンピックの３つの価値（卓越，友情，敬意・尊重），パラリンピックの４つの価値（勇気，強い意志，鼓舞，公平），国際パラリンピック委員会アクセシビリティガイド「アクセシビリティとインクルージョンの基本原則」（公平，尊厳，機能性），オリンピックの目的，そしてオリンピックのテーマとして「文化」「環境」について聞いた。事前に，オリンピック・パラリンピックに関連する新聞記事を読んでいたこともあり，オリンピックが「平和の祭典」であり，「文化」プログラムが催されること，「公平」「友情」「敬意・尊重」といったキーワードについて多くの生徒が知っていると答えた。また，TOKYO2020 の大会コンセプトである「多様性と調和」も約７割の生徒が知っていると答えており，これからの世界ではこのような考え方が必要であると認識していることがうかがえた。一方，「アクセシビリティとインクルージョンの基本原則」である「機能性」について知っている生徒は９人であった。パラリンピックの価値の一つで，人の心を揺さぶり駆り立てる力を表す「鼓舞（Inspiration)」を知っている生徒が23人であったことからも，これまでパラリンピックについては単なる知識としてもあまり学ぶ機会がなかったことがうかがえた。オリンピズムは肉体と意思と精神のすべての資質を高め，バランスよく融合させる生き方の哲学であり，オリンピズムの目的は，人類の調和のとれた発展にスポーツを役立てることである。オリンピック・パラリンピックの価値理解まで結びつくような資料提示・授業展開の必要性が感じられた。

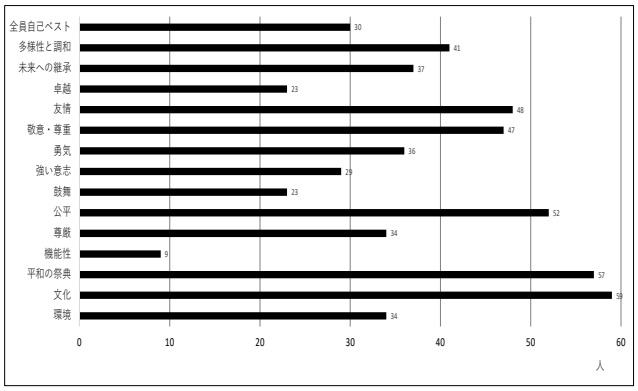

図２　オリ・パラについて知っているキーワード

2.2.3　学習計画

レポートのテーマが異なる４人を１グループとし，以下の単元計画（表１）で，授業を実施した。

表１　学　習　計　画

時間	項　目	学　習　内　容
1	スポーツの始まりと変遷	○古代オリンピックの発生とその目的 ○近代スポーツから国際スポーツへ
2	オリンピックと国際理解	○近代オリンピックの誕生とその目的 ○オリンピック憲章を読んでみよう
3	パラリンピックの目指すもの	○パラリンピックの誕生とその目的 ○パラリンピックの意義
4 5	オリ・パラの現状について多面的に考える	○オリ・パラの融合は可能か ○パラスポーツの可能性と今後 ○スポーツと国の問題
6	まとめ	○スポーツのあり方を考える

第１時と第２時は，小山（2016）の実践を参考にして，グループで話し合う時に土台となる基本的な知識を学ぶ学習を行った。第１時は，古代オリンピックが宗教行事として行われていたこと，それをもとに近代オリンピックが構想されていることを理解することをねらいとした学習を行った。その中で，1964東京オリンピックの最終聖火ランナーが1945年8月6日広島県生まれであることの意味を考え，平昌冬季オリンピック・パラリンピック前の国連事務総長のオリンピック停戦を呼びかけるメッセージを読み，TOKYO2020「PEACE　ORIZURU」の活動にふれ，近代オリンピックの目的を考えた。

第２時は，前時を踏まえ，近代オリンピックの目的はスポーツを通しての人間形成と，国際理解を深め平和を願う教育運動であることを理解することをねらいとし，現行のオリンピック憲章を読んで，スポーツの本質となるキーワードを整理した。ちょうどこの授業の直前に校内球技大会があった。オリンピック第１回アテネ大会（1896）が８競技，14カ国から241人の参加であったことと比較し（当校は全校生徒965名24クラス），当時の規模や選手たちの思いについて想像して考えることができた。また，当時のスポーツ界は組織化されておらず，個人参加・自費参加であったことにもふれ，オリンピズムという究極の目標実現のために，オリンピック憲章は時代に合わせて何度も改訂されていることも理解できた。その上で，自分やまわりの人が読んだ新聞記事とオリンピズムの関連について考え，現在の課題を整理し，グループで共有した（表２）。

第３時は，スポーツは障害者にとって楽しみな存在であり，障害者の自尊心や自信を取り戻すことに有効であるという考えがパラリンピックの原点であることを知り，それをもとに今のパラリンピックがあることを理解した。そして，パラリンピックに参加する国・地域が増加しているのはなぜかを考えることを通して，パラリンピックの意義をまとめた。（表３）。

表２　第２時の授業展開の概要

時間	学習活動	指導上の留意点
導入	○近代オリンピックの誕生について ・クーベルタンはなぜオリンピックを復活させようと考えたか？ ・19 世紀後半のスポーツの状況 ・ドイツ帝国による古代オリンピア　遺跡の発掘終了（1891） ・1894　IOC 結成 ・第１回アテネ大会（1896）の種目	・前時の生徒の記述から ・当時のフランスの状況，イギリスの産業革命 ・イギリスでスポーツの制度化が進み，伝統的な名門校では教育に取り入れられていた。 ・当時の欧州では古代への夢が語られていた。 ・８競技，14 か国から 241 選手が参加
展開	○近代オリンピックの目的 ・オリンピック憲章　オリンピズムの根本原則を読む。	・時代とともに変わるオリンピック憲章
	・オリンピズムは肉体と意思と精神のすべての資質を高め，バランスよく融合させる生き方の哲学。スポーツを文化，教育と融合させ，生き方の創造を探求する。 ・オリンピズムの目的は，人間の尊厳の保持に重きを置く平和な社会の推進を目指すために，人類の調和のとれた発展にスポーツを役立てる。 ・スポーツをすることは人権の１つである。 ・友情，連帯，フェアプレーの精神とともに相互理解が求められる。 ・スポーツ団体は，政治的に中立でなければならない。	
	・スポーツの本質について，キーワードを整理する。 ・オリンピックムーブメントとは オリンピズムを日々のスポーツや生活に生かしていくこと。 ・オリンピックの３つの価値 ○自分やまわりの人が読んだ新聞記事と，オリンピック憲章の関連について考える	・クーベルタンが IOC を設立してちょうど 100 年後 1994 年に初めて環境の項目が加えられた。ドーピング規定（1999） ・ドーピング，難民選手団 ・卓越，友情，尊敬・尊重について解説する。 ・メダルをとることより大切なこととは何だろう？
整理	○オリンピックやスポーツの課題 ・感想を出し合う。	・オリンピックやスポーツの課題を通して，そのあり方を考えていこう。

表３　第３時の授業展開の概要

時間	学習活動	指導上の留意点
導入	○パラリンピックの始まりについて ・パラリンピックがめざすものについて考える。 ・原点はストーク・マンデビル大会 ・写真を見ながら，パラリンピックの始まりの説明を聞く。 ・IPC 設立（1989） ・オリンピックと同一組織委員会による同一都市開催スタート（2008）	・患者にとっての楽しみ ・スポーツは自尊心や自信を取り戻すために有効 ・リハビリ患者のためのアーチェリー大会 ・国立別府病院医師　中村裕 欧米の障害者がスポーツをする姿に衝撃を受け，リハビリにスポーツを取り入れた。 ・障害者の社会参加が進んだ。
展開	○パラリンピックとは ・パラリンピックの言葉の由来は？ ・「４つの価値」とシンボルマークの意味 ・IPC が目指す究極のゴールは　共生社会を創出すること ○グラフを見て，パラリンピックに参加する国・地域は増加しているのはなぜか考える ・まず，自分で考えホワイトボードに書きだす。その後，グループで意見を出し合い，グループの意見として整理し発表する。	・障害者が参加する世界最高峰のスポーツの祭典 ・勇気，強い意志，公平，ｲﾝｽﾋﾟﾚｰｼｮﾝについて解説する。 ・Panasonic 映像教材 「ﾊﾟﾗﾘﾝﾋﾟｯｸとはどんなもの」（２分 56 秒） ・前時に読んだオリンピック憲章を踏まえて，考えさせる。 スポーツをする権利が認識された。 社会のバリアを減らすことの必要性に気づく人が増えた。
整理	○パラリンピックの意義をまとめる ・多様性を認め誰もが個性や能力を発揮し活躍できる公正な機会 ・社会にあるバリアを減らす必要性や，発想の転換が必要であることに気づかせてくれる。	・グラフを見て，考えたことからパラリンピックの意義を整理する。

表４　第４時の授業展開の概要

時間	学習活動	指導上の留意点
導入	○友だちが読んだ新聞記事から，現在の課題を整理する ・「パラスポーツ」はどのように変わっていくといいだろう？	・ロンドンパラリンピック後の英国障害者への調査記事では，スポーツに取り組みたいと感じなかった人が 79 %
展開	○五輪とパラリンピックの融合について考える ・自分の考え明らかにし，理由を記述する。 ・新聞記事 「跳ぶ　五輪とパラの壁をなくすために（朝日，2019.8.25）」を読んで考える。 ・グループで考えを共有し，グループの意見としてまとめ，全体でも共有する ○「パラスポーツ」はどのように変わっていくといいだろう？ 追加資料を読んで，グループで考えをまとめて発表する。 ・新聞記事 もっと知りたいパラリンピック３（朝日，2019.10.24） 尼崎脱線事故を乗り越えた　アーチェリー選手の記事（山陽，2019.8.25） ・新聞記事のコメント 「健常者と一緒の大会に」競技団体組織を一つに	・世界パラ陸上男子走り幅跳びのマルクスレーム選手の記録は，リオオリンピックの優勝記録を越えた。 ・パラリンピアンの地位向上 ・資料を読むことで視点を増やしながら，多面的にじっくり考えさせる。 ・走り高跳び鈴木徹選手解説動画 ・スポーツの本質 ・障がいの種類・程度の違いどう戦っているのだろう？ 例　陸上競技のクラス分け ・大会出場機会の確保のための工夫 例　ウィルチェアラグビーのチーム編成 ・公平性を突き詰めて細分化しすぎると，そのクラスの選手が減少し，削減対象になったり，競技力が低下する。 ・付添いの確保も課題 ・障害者のスポーツ施設利用の法整備の必要性
整理	○ TOKYO2020 大会は世界を変える ・考え方を革新し，持続可能な社会を目指している。	・パラリンピックをきっかけに，パラスポーツを継続的に根付かせていく取り組みが必要である。

表５　第５時の授業展開の概要

時間	学習活動	指導上の留意点
導入	○東京五輪マラソン札幌開催を受け瀬古利彦を泣かせた一言 ・モスクワボイコットを知っているか？	・五輪代表内定，服部勇馬選手の言葉 「札幌でも走れるので僕は幸せです」
展開	○モスクワオリンピック（1980） ・レスリング高田選手の映像を見る。 ・アメリカや日本のボイコット ・スポーツはビジネスを考えず，国の補助とささやかな善意で賄われていた。 ・開会式にイギリス，オーストラリアはオリンピック旗で入場。 ・感想・意見を出し合う。 ○オリ･パラで世界を変えることができる時代 ・新聞記事「五輪より大事なものとは（朝日，2019.5.15）」 「メダル国の志向示す（朝日，2016.6.8）」 「いつか祖国の旗で（朝日，2016.8.22）」 「イスラエル拒否悩むスポーツ選手(朝日, 2019.10.30)」を読んで，感想・意見を出し合う。 ・「どんな視点でスポーツを観るとよいか」グループで意見をまとめる。	・スポーツが国や政治に最も利用された例 ・政府が JOC に不参加を勧告 ・公的サポートの必要性と政治の介入 一方，ロスオリンピックからの民営化は商業主義の問題を作るきっかけとなった。 ・時代とともに変わるオリンピック憲章　選手団の旗，歌 メダルを手にするのは国ではなく個人。 ・難民選手団の写真を提示 ・資料配布（４人グループに４つの記事） 一人１つの記事を読み，内容を交換。 ・オリ・パラを通して，他者や他国のために何ができるのか考える時代。 ・IOC と OCOG は国ごとの世界ランキングを作成してはならない。 ・オリンピック憲章や自分が読んだ新聞記事も踏まえて考える。
整理	○グループ毎に発表 「どんな視点でスポーツを観るとよいか」 ・感想を出し合う。	・アスリートファーストになっているか。 ・国の枠組みを超え，世界で共通の課題に向き合う必要性を再確認。

（第１時と第６時の授業展開の概要は紙面の都合で省略した）

第４時は，世界パラ陸上男子走り幅跳びのマルクスレーム選手の記事「跳ぶ　五輪とパラの壁をなくすために（朝日，2019.8.25)」を読み，五輪とパラリンピックの融合について考えることを軸に，パラリンピックの現在の課題を整理し，パラスポーツがどのように変わっていくとよいか考えた（表４）。

第５時は，スポーツが国や政治に最も利用された事例としてモスクワボイコットを学び，スポーツと社会や政治との関係を考えた。その上で，新聞記事から現在の課題を整理し，どんな視点でスポーツを観るとよいかグループで考えをまとめた。スポーツは誰のためにあるのかという根本的な問題につながる学習をねらいとした（表５）。

第６時は，これまでの授業を振り返り，さらに３つの新聞記事「東京五輪　理想の姿は（2017.2.24)」「有森裕子さん，国際貢献への道（朝日，2019.6.22)」「東京五輪・パラリンピックは SDGs に応えられるか（朝日，2019.10.16)」を読んで，「スポーツの意味」「スポーツの目的」「人間にとってのスポーツの文化的価値」など，グループでテーマを設定し意見をまとめた。

このように，生徒がレポートに添付したものや授業者が用意した複数の新聞記事や動画から問題点を整理し，話し合う活動を通して，スポーツのあり方を考えていった。話し合いの過程で疑問に思ったことは，随時各自のスマートフォン等で検索し，キーワードや頭に浮かんだことをバタフライボード（ノート型ホワイトボード）を利用して整理した。そして，学んだことを生きて働く知識にするために，グループで考えた図や言葉で発表し，互いの学びを共有した。

2.3. 分析方法

第４時～第６時の記述内容，単元終了後のまとめについて考察し，スポーツの文化的価値を理解し，スポーツへの関わり方を考えることにつながる授業のあり方を検討する。単元終了後のまとめは，以下の観点で考察する。

①グループでの話し合いについて
②スポーツの価値をどう捉えたか
③今後どのようにスポーツをしていきたいか
④スポーツの見方の変化

３．結果と考察

3.1　第４時～第６時の記述内容

3.1.1　第４時の記述内容

第４時は，世界パラ陸上男子走り幅跳びのマルクスレーム選手の記事「跳ぶ　五輪とパラの壁をなくすために（朝日，2019.8.25)」を読み，五輪とパラリンピックの融合について考えることを軸に，パラスポーツがどのように変わっていくとよいか考えた。

授業計画の段階で予想した通り，義足はずるいとか，義足に優位性がないことを証明できなければ公平ではないため，マルクス選手はオリンピックに出場するべきではないとか，踏切足が義足でなければよいといった「公平性」に焦点を当てた話し合いが進められた。そこで，踏切１歩前が義足の走り高跳び鈴木徹選手の動画や，公平性を保つためにパラリンピックがどのように行われているかを確認し，スポーツの本質を踏まえて話し合いを進めた。「公平性」を突き詰めていくと各競技クラスの選手が減り，競技自体が削減されることにつながる。つまり，パラリンピック選手の活躍する機会が奪われることになる。これまで，オリンピックとパラリンピックが分かれていることに何も疑問を感じていなかったが，マルクス選手の「障害者だけをなぜ分けるのか」という問いに出会い，スポーツは人権の一つであること，「義足をつけて一生懸命練習をしてきたのは健常者の人たちと同じ」とその思いを想像し思考を深めていった。そして，義足のマルクス選手がオリンピックに出場して優勝したら批判が殺到するのではないか，その根底に「障害者が健常者に勝つのはおかしい」という自分自身も含めた差別的な考え方があることに気づき，そこに違和感を覚える，とまとめたグループがあった。

また，国の経済力によって義足を作る技術に違いが生まれること，パラリンピックよりもオリンピックの方が人気があり注目度が高いことなどの課題を整理することができた。そして，体の不自由な人たちへの理解を深め，偏見をなくすために，もっと関わりを持てるような社会にする必要性を感じ，障害を持つ人が認められる場を作ることや，パラリンピックの競技をオリンピックの競技の中の一つとして行っていくことなど，高校生なりの解決策を提案するグループもあった。前時に学んだパラリンピックの意義について，生徒達の思考を通してより理解が深められた。

3.1.2　第５時の記述内容

第５時は，スポーツが国や政治に最も利用された事例としてモスクワボイコットを学び，スポーツと社会や政治との関係を考え，どんな視点でスポーツを観るとよいかグループで考えをまとめた。

40年前のモスクワボイコットを知っている生徒はいなかった。そして，生徒たちにとって自分の国の選手を応援するのは当然のこと，マスコミによって国別メダル獲得数が報道されることに何の疑いもなくオリンピックを見てきていたようである。

はじめてスポーツが政治利用されたことを知り，「国

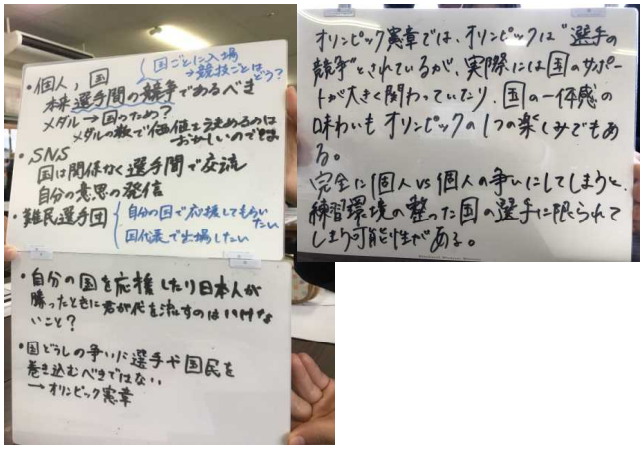

図３　第５時の話し合いでの記述

から，政治的な問題を原因として，選手に圧力をかけるべきではない」と，オリンピズムを踏まえた意見で一致した。一方で，完全に個人対個人の争いにしてしまうと，練習環境の整った国の選手しか大会に出場できなくなるため国のサポートが必要なこと，さらに国によって選手の育成に使える費用が違うため，スポーツができる環境や設備を整えるためには国際間の援助が必要だ，と思考を深めることができた。

このような話し合いを踏まえて，「どんな視点でスポーツを観るとよいか」という問いには，「オリンピックの価値（卓越，友情，尊敬・尊重）を忘れてはいけない」「勝敗や記録がすべてではない」「メダルには変えられない選手の努力がある」と，「スポーツ観戦がスポーツというもの自体の面白さに心を動かされる機会になればよいと思う」というような意見が出た。また，「国対抗の意識」が変わらないのは，国民一人一人の意識も関係があると考え，国の事情が出されたとき，正しくないと思えるかがポイントになる，とまとめたグループがあった。

授業後の感想で，「今回の授業で，いつも“国”ということを意識してしまいがちだったが，“個人”という見方も大切なのだと感じた。その選手はどういう人なのか，どういった背景で参加しているのかなどいろいろな面から観戦してみたい。それぞれに違った経緯のあるアスリートが集まるのがオリンピック・パラリンピックの１つの特徴だと思う。」という記述があった。オリンピックムーブメントはオリンピズムを日々のスポーツや生活に生かしていくことである。生徒たちがこの感想にあるような視点でオリンピック・パラリンピックを観て，選手の躍動やその選手の思いに触れることで少しでも自分の生き方を考えることがあったなら，それが知識が生きて働くことになるのだと思う。

3.1.3　第６時の記述内容

第６時は，これまでの授業を振り返り，さらに３つの新聞記事「東京五輪　理想の姿は（2017.2.24）」「有森裕子さん，国際貢献への道（朝日，2019.6.22）」「東京五輪・パラリンピックは SDGs に応えられるか（朝日，2019.10.16）」を読んで，「スポーツの意味」「スポーツの目的」「人間にとってのスポーツの文化的価値」など，グループでテーマを設定し意見をまとめた。

新聞記事「東京五輪　理想の姿は（2017.2.24）」は，オリンピアンに TOKYO2020 大会をどんな大会にし，何を残したいか取材した記事である。「有森裕子さん，国際貢献への道（朝日，2019.6.22）」は，女子マラソンのオリンピアンである有森裕子さんが，カンボジアでハーフマラソン大会を企画・運営してきた記事である。スポーツの価値を肌で感じるオリンピアン達が語ったことばをキーワードとして，話し合いが進められた。

「Hearts of Gold　アンコールワット国際ハーフマラソン　18 年の奇跡（VTR）」のインタビューの中で，1996 年当時有森さんが練習で走っていると，トゥクトゥク（三輪タクシー）がやってきて「乗ってけ！」と言う。有森さんが「練習している」と言っても意味が通じず「何で走るんだ？と聞かれる」という映像があった。日本ではあり得ない会話である。そして，ランニングの楽しさを知らなかった国の人々が，一つの大会を終え，翌年には笑顔で練習として走っている映像が続く。スポーツが持っている力に驚かされる出来事である。この数分間の映像は，生徒達にとって，スポーツの意味を考えるよい刺激になっていた。

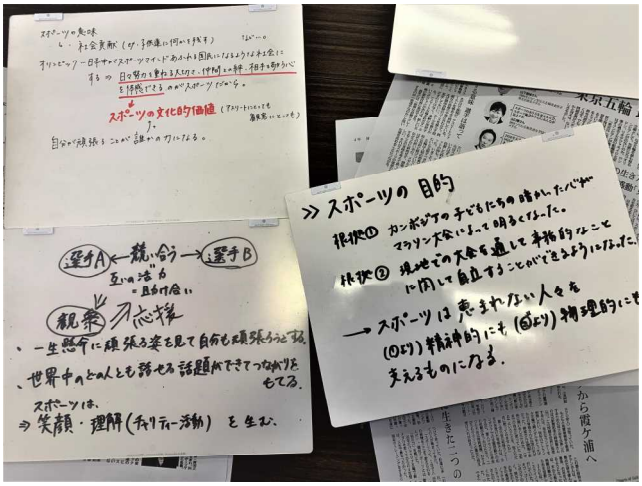

図４　第６時の話し合いでの記述

スポーツは，努力の大切さを学ぶ場，仲間との一体感や絆を深める場，相手を敬う心や思いやりの心を見せる場である。しかし，スポーツの影響はスポーツの範囲だけに限らない。スポーツで人と人とがつながる。スポー

ツは笑顔や理解（チャリティー活動）を生む。このようなことが，各グループの話し合いで語られていた。

「スポーツの目的」をテーマにしたグループは，「生きる活力（楽しさ)」,「健康増進」,「コミュニティへの参画」,「言語を越えたコミュニケーション」,「社会貢献」をキーワードとして整理した。

「東京五輪・パラリンピックは SDGs に応えられるか（朝日，2019.10.16)」の記事の中で，有森さんが「ニューヨークマラソンはがん患者の支援が目的とされている。日本ではマラソンのタイムについて関心が高く，海外では何のチャリティーだったのか，大会の社会的意義について関心が高くなっている」ことを紹介している。

「スポーツの目的」をテーマとした別のグループは，先ほどのキーワードに，スポーツに参加できることに感謝することを加え，結論として，「スポーツとは社会をよりよくするための源である。」とまとめた。また，「スポーツによって人々の価値観を変えることができる。よって，スポーツは未来につながる。」とまとめたグループもあった。

「スポーツのあり方」をテーマにしたグループは，「そもそもスポーツは娯楽。誰もがスポーツをすることに楽しさを見いだせることがベスト。勝敗による楽しさ，体を動かすことへの喜び，人と関わることの楽しさなどを広める。子どももお年寄りも障害者の人も日常的にスポーツを楽しめる。オリンピック・パラリンピック開催時だけ盛り上がるのではなく，健常者と障害者が一緒にスポーツをすることで当たり前に共生できる社会をつくることができる」とスポーツの価値を踏まえてまとめた。

別のグループは，「生きる，を支えるための・・・」というテーマで,「(スポーツの意義や環境などについて) 考えれば考えるほど疑問・悩みはつきないと感じた。そして，結局すべての考えがたどり着く先は“生きる”ことだと強く思った。」そして結論として「私たちは一人では生きていけない。辛くて生きにくい世の中で，それでも生きていくため，オリンピック・パラリンピック，スポーツがある。」とまとめた。

また，現在さまざまな問題が起きているのは，一般の人，国，選手などさまざまな立場の人が，それぞれのスポーツへの関わり方・考え方に違いがあるから理解し合えないまま批判することになる，もっとどの立場の人もオリンピズムを理解して，スポーツを楽しめるようにするといいと思う，とまとめたグループがあった。

まとめの時間に，あえて「オリンピックの意義」をテーマにしたグループがある。「オリンピック・パラリンピックを通じて，世界全体で生まれる一体感が，世界が抱える課題を発見・解決する第一歩になる！！」新聞記事を読んでレポートに取り組んだこと，オリンピック・パラリンピックの現実にある対立的テーマについて多面的に話し合うことを通して，今までなんとなく理解していた「オリンピックの意義」が生徒達の中にストンと落ちて,生徒達の言葉で語られたのではないだろうか。スポーツの価値を理解し，オリンピック・パラリンピックを通して，他者や他国のために何ができるのか考える時代であることを理解したことになるのではないだろうか。

3.2　単元終了後のまとめ

3.2.1　グループでの話し合いについて

図５は単元終了後の調査で「グループでの話し合いで，自分の考えを他者に伝えることが出来ましたか」をまとめたものである。58 人中「十分できた」が 34 人，「できた」が 23 人で，一人を除いて，話し合いで自分の考えを他者に伝えることができたと答えている。図６は単元終了後の調査で「グループでの話し合いで，自分の思考が深まりましたか」をまとめたものである。58 人中「とても深まった」が 46 人，「深まった」が 12 人で，生徒全員が話し合いで自分の思考が深まったと答えている。単元終了後の振り返り調査で特に多かった記述は，自分とは異なる視点を持つ友達の意見を聞けたことで，思考が深まったというものである。そして，そのようにして思考が深まることが楽しかったと述べている（表６）。自分と異なる意見を持つ人の考えを聞くことで，

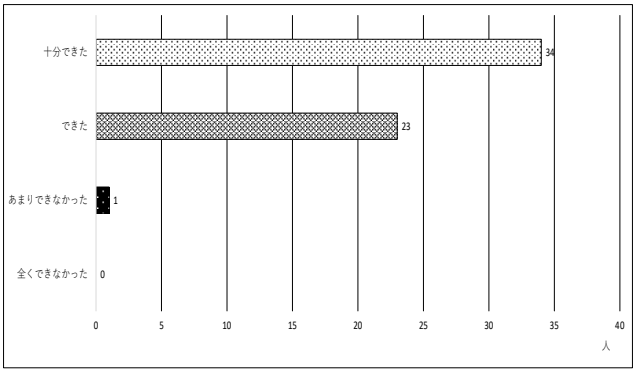

図5　自分の考えを他者に伝えられたか

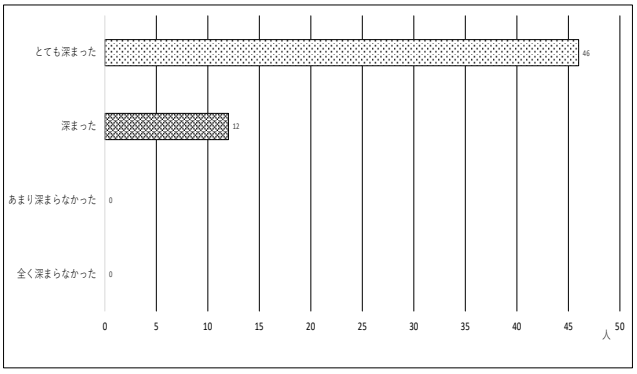

図6　思考が深まったか

表６　グループでの話し合いについて（一部を抜粋）

多様な考えを持つ他者との対話で思考が深まった

・自分で考える時間，グループでの意見交換，全体での共有といった 3 ステップがあることで，視野がどんどん広がっていった。友達のいろいろな意見は自分 1 人では思いつかないようなことばかりで，それに触れられたことはすごく良い経験になった。
・いろんな人の意見が聞けたことが良かった。自分とは違う視点からの意見も聞くことが出来，難しい課題についてよく考えることができた。大人になった時，このようにきちんと考えて人と意見を交流することは本当に大切になってくると思う。
・自分と異なった意見の人の考えを聞くことで自分の意見を客観的に見，考えることができた。また，どうやったら他人に分かりやすく伝えられるのか考える良い機会にもなった。
・様々な視点から偏見や考え方などについて討論ができ，スポーツを通して国同士やハンディキャップなどの課題について考えることができた。普段，違和感を感じることをとことんみんなで考えていくことで自分では思いつかなかった新たな視点を手に入れることができて，色々な面から考える力がついたと思う。
・同じ文章を読んでも人それぞれ考えることが全く違っていて，そのようなたくさんの意見を班の中で協議しあい，クラスで共有できたことが，新たな視点で物事を見ることにつながった。
・普段なら目を背けてしまう問題とちゃんと向き合うことができた。普段から考えられるようになるいいきっかけになった。
・意見交換をすることは自分の考えが深まるので面白かった。

言葉選びの難しさ

・頭の中の考えをまるごと他の人に伝えること。レポートのようにゆっくり考えながら意見を述べることができないので，言葉を選びながら，どうすればより自分の考えが伝わるかを考えながら話し合った。
・ぱっと頭の中で浮かんだイメージを他の人と共有するためにしっかり文字にすること。また，一つのテーマについて様々な角度から意見を考えること。

全員が納得する方法を見つけ出すことの難しさ

・一人一人が違う環境で生きてきて，考え方や常識も違って，目指しているものも違う。国同士の大きな関係もあり，一つ一つが複雑に絡みすぎていて，解決策が見つからなかった。
・自分や周りの人とは違う環境で生きている人のことについて考えることや，世間の人達がどんなことを考えるか，どう思うかについて考えを巡らせること。

自分の意見を客観的かつ批判的に考えることができ，新たな視点を持つことにつながったことがうかがえる。

その一方で，視野が広がった分，どう意見をまとめるかが難しかったとも答えている。自分の考えを相手に伝えるとき，特に自分の考えと相手の考えが異なるときの言葉選びに苦心したり，様々な意見をまとめたとき，他のグループに簡潔に伝えるためにはどのようにボードに書けばよいのかを考えるのが難しかったようである。

また，どうしてもスポーツ＝競争のイメージが根強く，スポーツがどうあるべきか，オリンピック・パラリンピックの意義やスポーツの価値を考えるのは想像以上に深く複雑だったと，問い自体が難しかったとも答えている。

「スポーツは，意外と奥が深く，SDGs という一見オリンピックと関係がなさそうな言葉も，人々の生活の観点からみれば，実はスポーツと大きく関わっていた。考える時に，様々な視点から，自分達が持っている知識から，考えなくてはならなかった所が，楽しいと同時に難しかった。」と述べている。これは，話し合いを通して見えてきた新しい世界を表現するための苦しさだったのではないか思う。つまり，それぞれの生徒が「知識」を問い直したことによる難しさだったのではないだろうか。

レポートに取り組むことで，授業前からオリンピック・パラリンピックに興味・関心があったことに加え，現実にある対立的テーマについて，様々な角度から考えていったことで，生徒達の思考を深める十分な成果があったといえる。

3.2.2　スポーツの価値をどう捉えたか

表７は単元終了後の調査「スポーツの価値について，あなたの考えを書いてください。」について，オリンピック・パラリンピック教育に関する有識者会議（2016）が示すスポーツの価値に照らし合わせてまとめたものである。生きる活力となる精神的な充足感や楽しさをもたらし，健康で文化的な生活を営む基盤となり，社会や世界を変える力となる，という大きく３つに分類できた。その中でキーワードとなったのは，絆，仲間との一体感，人と人とのつながりという言葉であった。これらの言葉が根底にあり，そこにさらに価値付けされている。

ある生徒は「人と人とを繋げたり，その人の生きがいになったりするもの。大会やオリンピックももちろんスポーツにとって大事だけど，競技的な意味だけでなく，一般の方々もスポーツを通して仲間が増えたり楽しみを見つけたりできる。誰かと一緒に体を動かすことはとても楽しい。だから，スポーツを通して，楽しみながら健康増進や生きがいの発見，仲間作りができ，それが社会にも貢献する。勝負に勝つことだけがスポーツの価値ではないと気付くことができた。」とまとめている。

また別の生徒は，「選手がスポーツを一生懸命する姿は，多くの人に勇気を与える。選手の活躍によって人々

表７　スポーツの価値について（一部を抜粋）

精神的な充足感・楽しさをもたらす

・勝利に向かう仲間間での楽しさ，相手との競争の楽しさ，単純に体を動かす楽しさ，また観戦するのも楽しさの１つ。その楽しさのために，作戦など話し合える機会が設けられ，人と人との繋がりも大きな価値だと言える。
・運動があまり得意でない人にとっても他の人と交流する良い機会。スポーツを通して人と繋がれたり目標を達成する経験を得られることが大きな意味となる。
・仲間と協力したり，工夫したりでき，その結果，友情や信頼関係が深まり，自然と笑顔になる。
・夢や目標を持つことができ，生き生きと希望を持って生きていける。夢を実現させるために，日々努力を重ねて辛い事を乗り越えていくことで，心身共に成長することができる。
・人々を勇気づけたり団結させたりするために必要なもの。頑張っている人をみんなで応援すると感動の瞬間を一緒に味わうことができるので一体感や絆がうまれると同時に，自分も頑張ろうと思う勇気を貰え，それが活力に変わる。
・自分と向き合い，成長していく機会になる。

健康で文化的な生活を営む基盤

・心身の健康や様々な人との関わりを生み出す，人生を豊かに生きるための方法。
・生きる楽しさを見つけたり，違う国の人との交流によってお互いの文化を学べる。
・仲間と助け合う優しさが生まれることと健康増進になること
・如何なる状況にある人でも平等に競える。

社会や世界を変える力

・スポーツでカンボジアの人の価値観が変わったように人々に勇気を与えたり変わるきっかけになったりするもの。
・スポーツがもたらす感動や選手の姿を通して，社会貢献することに価値がある。国や世間の支援がないとできないスポーツだから，そのスポーツで成功して得たものは，個人の利益で終わらせるのではなく，社会に還元しないと意味がない。そうすることで人や社会との繋がりも強化でき，生きる活力につながる。
・未来に繋がるものや社会をより良くする鍵を見つけることができる。そして，性別，肌の色などに関係なく一つのことを共有できるという一体感を感じられること。
・選手間での競争に留まらず，それを応援する観客も含めて一体感を生むのがスポーツである。多種多様な人々が一堂に会することで相互理解にもつながる。また，スポーツをする環境を整える中で社会全体が発展していく。
・人々の価値観(障害者，異なる人種の人に対してなど)を変えることができる。
・人間の娯楽として生まれたものであるということから，国籍や障害の有無などの違いに関わらず誰にでも楽しめ，平和や尊重，努力の大切さ，高め合う意識などを生み出すことができる。
・人と人とが言語や性別，それぞれの特徴を超えて繋がる事のできる機会。
・平和な世界を創るきっかけとなる。

がスポーツにより関心を持つだけでなく，スポーツができる環境や設備が整備されたり，国の発展に繋がることもある。また，様々な国の選手や障害者が，大きな場でスポーツをすることを通じて，国際交流が盛んになったり，障害者にとってよりよい社会ができたりするきっかけにもなる。（中略）だからこそ，スポーツは人々や社会により良い影響を与え，平和な世界を導く第一歩になるのだと思う。」「オリンピックは世界平和をひとつの目的としており，選手間の仲は私が目指すスポーツの形。しかし，劣悪な関係の国もあり，これからオリンピックを通して，国同士が普段の悪い関係を少しずつ改善することを望む。」とまとめている。

「人々が好きなことをできる社会は縛られていなくて良いと思う。好んでスポーツができるこの状況にいるということは，それだけ恵まれている。大切にしなければならない文化だと思う。」と，視野を広げた生徒もいる。資料を手がかりに多面的に話し合うことを通して，思考を深め，地球規模で人間にとってのスポーツの価値を理解することができたと思う。

3.2.3　今後どのようにスポーツをしていきたいか

表８は単元終了後の調査で，「今後どのようにスポーツをしていきたいか」をまとめたものである。多かった記述は「楽しむ」こと，次いで「友情」を育み，他者を「尊重」することであった。

「楽しむ」は「自分への挑戦」と「スポーツを通したコミュニケーション」とに分類できる。感想では，「スポーツをする上で一番大事にしたいことは楽しむ，ということ。結果を求めすぎて追い込まれたり，そのプレッシャーに押し潰される人もいた，ということを授業で知って，それでは元も子もない，と思った。確かに，結果は大事で，それが伴えばより一層スポーツを面白く感じることができるのかもしれないけれど，心のどこかでスポーツを楽しむ気持ちを忘れないようにしなければ達成できないことだと感じた。」と，自分への挑戦であっても楽しむことの大切さを述べている。「同じ動きを繰り返す中での，ほんの少しずつの自分の変化を繊細にキャッチする。スポーツが楽しくて仕方がないと思う人々は自然とそれが出来ているのだと思う。」と本質的な楽し

表８　今後どのようにスポーツをしていきたいか（一部を抜粋）

楽しむ

自分への挑戦

・自分のできなかったことができるようになったり，記録が伸びたりしたときの喜びを感じられるように。
・スポーツを自分を身体的・精神的に高めるものとして積極的に捉え，スポーツができることのありがたみを感じながら取り組みたい。
・仲間と協力したり，時には対決していく中で，スポーツって楽しい！！と思えるように全力で楽しみたい。
・たくさんのスポーツを経験し，見るだけではわからないスポーツの楽しさを存分に味わいたい。
・スポーツの価値やスポーツそのものの面白さを感じながらスポーツが出来たらいいなと思う。

スポーツを通したコミュニケーション

・結果ばかり見るのではなく，そこまでの努力の過程やスポーツを通して生まれる繋がりを大切にしながら楽しむ。
・仲間と高め合いながらスポーツする方が互いの能力の向上や楽しさに結びつくと思う。
・自分のチームの勝ち負けだけにこだわらず，参加者みんなが頑張っていて，楽しんでいることに気づけるようにしたい。
・自分を追い込むだけの苦しいものではなく，仲間と一緒に楽しむものだと改めてわかった。積極的にスポーツをして仲間との絆を深めながら楽しもう。
・自由にスポーツができない人もいる中で，スポーツができる幸せや感謝を感じながら，みんなで楽しんでできたらいい。

友情・尊重

・先日あった球技大会の目的は親睦を深めることでそれによってクラスだけでなくほかのクラスの子とも仲良くなることが出来た。これがオリンピックムーブメントの目的，世界平和につながるのではないかと思う。今後も，ルールをきちんと理解して，相手を尊重しながら，どうしたらみんなが仲良くプレーできるかを考えながらスポーツをしていきたい。
・お互いに尊重しあい，結果だけではなく，そこに至るまでの過程も重視しながら，スポーツをしていきたい。
・オリンピックは，順位を決める大きな大会だけど，相手を尊重し，共に高めあっていく大会でもある。相手のことを考え，声を掛け合い，楽しめるようにしていきたい。
・オリンピック・ムーブメントでは，平和な社会を推進することや協調性のある活動を大切にしているということを学んだ。まずはスポーツを楽しむことから始め，一緒にスポーツをする相手の意見も尊重することを忘れないことで，連携プレーなどが上手にできるようになりたいと思った。
・スポーツは世界の人ときっと言葉はなくても一緒に楽しめる。その中で，オリンピズムのフェアプレーの精神を持って，取り組むことが大事である。だから，相手を尊ぶ姿勢を持ってスポーツするべきだと思う。
・スポーツは一人でできないということを改めて理解しなくてはいけないと思った。どうしても，自分がスポーツをするときは周りを敵視してしまいがちである。しかし，競うということは戦いではないので，自分と他人の心とかを思いやるよう心がけようと思った。

さを述べ，新たな学びを獲得したその先に記録の更新や技能の向上があると述べている。また，「勝敗がつくものはやっていていろんな感情が生まれ達成感がある。しかし，そのことでスポーツの本質，人との関わり方を忘れてはいけないと思う。自分を客観視できるような人間になることが大切だと思う。」と，オリンピズムに通じる人としてのあり方について述べているものもあった。

「今回の授業を通して，スポーツを楽しみたいのに難民だから，障害を持っているから等の理由で存分に楽しめていない人たちもいるということを知った。そんな人たちもいるのに自分はだるい，疲れるなどのつまらない理由で自らスポーツを楽しむことを避けていたことが申し訳なくなってきた。だからこれからはスポーツを楽しめるようにしたいなと思う。」と，世界共通の人類の文化としてのスポーツの意味を理解したことがうかがえる。「スポーツが出来るということに感謝して，スポーツをする価値を存分に発揮できるように心がけてやりたい。」「スポーツをする人全員が同じ環境でスポーツを楽しむことができるわけではないことを忘れず，自分がスポーツを楽しめることに感謝したい。」とも述べている。

「私はあまりスポーツをするのが得意ではないけれど，スポーツを通じて色んな人と関わることが出来ると学んだので，大人になって運動する機会がなくなっても自分から運動する機会を作っていきたいと思った。」と，スポーツを通したコミュニケーションを楽しむことを目的として運動したいと述べている。

また，多面的に話し合った経験から，「自身がスポーツをするだけでなく，多様な面からスポーツについて考え，スポーツの意義を考えながら楽しみたいと思います。」「公平性について考えるきっかけを得ることもできると思うので，そういうことにも目を向けたいと思う。」と観戦する視点でのスポーツとの関わり方を述べている。また，「パラリンピックに興味が湧いたので，いつもやっていることとは違うことをやってみたい。」「障害者スポーツ(車椅子バスケやブラインドサッカー等)を体感してみたい。」と，視野を広げ，新しいことを学びたいと述べている。

3.2.4　スポーツの見方の変化

表９は単元終了後の調査で，生徒達のスポーツに対する知識や考え方に変化があった記述についてまとめたものである。スポーツに対する違った視点や新しい考え方を見いだしたものを「スポーツの見方が変わった」にまとめた。

「オリンピック･パラリンピックの歴史を学ぶことを通じて，スポーツの社会における役割をしっかりと考えることが出来た。する･見るだけではなく，試合によって起こるさまざまな経済効果や社会的な効果を知ることができ，よりスポーツの大切さに気づくことが出来た。」と，オリンピック・パラリンピックの歴史からその意義を学び，それを踏まえて現実にある対立的テーマについてグループで話し合ったことで，より理解を深めたようである。

特に，第４時で扱った「五輪とパラリンピックの融合」については，とても考えさせられたという意見が多かった（表９）。「パラリンピックについて考えたことはなく，この授業を通して選手の悩みであったり社会のあり方であったりを学ぶことが出来てパラリンピックにも注目してみようと思った。」「自分の中にある偏見を見つけることもあった。」と述べている。

授業を終えて，以下のような感想を書いた生徒がいる。

> 体育理論の授業を受け，私が感じたのは相手の立場になって考えることの難しさです。パラの選手がオリンピックに出るという問題を考えた時，「障害の有無に関係なくスポーツができて，差別がなくていい考えだ」とはじめは思っていました。しかし観衆の反応や選手間でどんな問題が出てくるのかなどをグループで予想していくと，もし障害をもつ選手が好成績だったら義足だからよい結果が出たのではないかと思われてしまったり，障害をもつ選手はもたない選手より，よくない成績であって当たり前で仕方ない，と思われてしまうような可能性があることに気づきました。そしてそのことが差別を逆にさらに大きくしてしまうのではないかとも考えることができるとわかりました。
>
> わたしが「いい考えだ」と思ったことも一意見としてはありだとは思いますが，それは偏っていて，簡単に表すべきではないということを学びました。これをふまえ，わたしはこれから安直に善し悪しを判断せず，オリンピックなどを見る時は，選手や観客，ハンディキャップなどを考慮ししつつ，常に自分が偏見で選手を見ていないかを振り返りながら，ただ純粋に選手が頑張る姿を応援していきたいと思いました。

このことが，多様な立場の人同士の相互理解につながっていくのだと思う。

「障害について，あまり知らなかったが，話し合う中で自分の知らなかった取り組みや制度，スポーツについて知ることが出来た。盛り上がりや記録についての関心で終わってしまっていたオリンピックが，より身近になり，自分の中でのスポーツの意義を踏まえながら見たりするなど，今までとは違った見方でオリンピック，パラリンピックが観られると思う。」と述べている。

また，「オリンピック憲章などをきちんと見ていくと

表９　授業を通しての振り返り（一部を抜粋）

スポーツの見方が変わった

- 身体を鍛え，技を競うだけのものだと思っていたので，世界平和や相互理解を目指す目的もあると知って，スポーツって奥深いものなんだなと感じた。
- 今まで考えたことのなかった“スポーツの持つ本来の意味”や，“スポーツをする意味”を考えてみて新しい発見，考え方を見いだせたと思う。スポーツに対する価値観みたいなものが変わった。
- スポーツが社会に貢献(病院の設置など)していると知って，スポーツが人に与える力の凄さを感じた。
- 今までは大会での結果にしか注目していませんでしたが，その背景にある問題点を考えることで，スポーツが行えることは幸せなことだと分かったこと。
- オリンピックやパラリンピックで選手が記録をのばすこと，メダルを取ることだけに注目して応援するのは浅はかだと思った。世間ではスポーツをすることで絆が深まると言われているが，障害者と健常者の間で溝がより深まる危険性もあるとわかった。この授業で日本の社会，私たちの障害者に対する意識を考え直すことができて良かった。
- 私は海外での医療ボランティアに興味がある。恵まれない地域でのスポーツの価値や支援活動について知ることが出来て，日頃から色々な分野の事を知っていく事が大切であると学ぶことができたのが，すごくよかった。

オリ・パラの融合について考える

- グループはかなり意見が割れた。私の意見は，最終的には融合すべきだが，仲間の意見も納得できる。うまくまとめるのが難しかった。融合してしまったら，他の問題が出てきそうで，考えれば考えるほど難しいと思った。
- 障害者についてあまり知らないしどんな苦労があるのかも分からないから（中略）ちゃんと見極める必要があった。
- 差別になるのか，と考える時点で，差別だったり，勝手に可哀想だと思っていたり，この感覚が嫌だなと思った。差別というか，些細な違いを意識しないことは，思ったより難しかった。結局は人の意識が変わらないとダメだね，ということに行きついてしまい，どうしていくべきなのかを考えるとつまってしまった。でも，実際にそこ(人の意識を変えること)が１番だと思うので，まずはわたしたちが意識を変えていかなければならないなと思う。

スポーツにはたくさんの意味があると知ることができた。また，テレビでオリンピックやスポーツの大会について取り上げられているときに以前より興味を持って見るようになったり，出演者のコメントに疑問を持ったりできるようになった。」と知識をもとに批判的な視点で考えることができるようになったことがうかがえる。

第５時について，「私にとって１番印象的だった題材は，選手が国から圧力をかけられて，敵対している国の選手と対戦しないよう仕向けられていた，という記事だ。（中略）選手同士は互いを尊敬し，戦うことを望んでいるのに，国の事情でそれを妨げてはスポーツをする意味は一体どこへ消えてしまったのだろう，そう思った。国は，確かに選手にとって誇りとなるものだろうし，国の援助のおかげでより良い環境を提供してもらえることもあるだろう。しかし，国がオリンピックのメダルの数で競ったり，国際情勢に左右されてしまうようでは，スポーツ選手に失礼だし，競技をする意味もわからなくなる。そういった視点は今まで自分の中になかったので，それに気付けたのがよかったことだ。」と述べている。また，「今までスポーツ=体育であり，技能の高さだけに目が行きがちであったが，授業を通して結果だけではないスポーツに参加することそのものの意義について深く考えることができた。」「この授業を通して，今後スポーツをするときには，嫌がるのではなく，どうすれば楽しめるかを仲間と考え，工夫して楽しめるようにしようと思えるようになった。」と，スポーツの社会的な課題について批判的に思考することを通して，自身のスポーツへの関わり方を考えていくことにつながった。

「オリンピック憲章の内容で，抽象的に書かれていたところが，何を言いたいのかよく分からなかった。友達と話し合う時間がたくさんあったので，だんだん理解が深まった。」とあるように，オリンピック憲章を読んでその意義を言葉として知っただけでは，本当にその意味を理解することは難しい。今回の授業のように，オリンピズムを踏まえて現実にある対立的テーマについて考えることで，それが生徒達にとって生きて働く知識となり，生徒自身がスポーツを工夫して楽しもうと思えるような行動の変容につながっていくのではないかと思われる。

４．まとめ

本研究では，事前にオリンピック・パラリンピックに関連する新聞記事を読み，人間にとってのスポーツの価値を考えることを課題としてレポートを作成した。その後，レポートのテーマが異なる４人を１グループとし，新聞資料や映像を用いて，オリンピック・パラリンピックの現実にある対立的テーマについて多面的に話し合うことを通して，人間にとってのスポーツの文化的価値を理解させることを目的として授業を行った。対立的テーマとして，「五輪とパラリンピックの融合」「スポーツと国の問題」を取り上げた。

「五輪とパラリンピックの融合」では，オリンピズムを踏まえて，公平性について議論を深める中で自身の差別的な考えに気づき，スポーツは人権の一つであること，障害者への理解を深めるために健常者と障害者がもっと関わりを持てる社会にすること，障害を持つ人が認められる場を作ることの必要性を改めて理解できた。

「スポーツと国の問題」では，スポーツに国の事情が出されたときに，スポーツの価値に照らし合わせて批判的に考えられるかがポイントになることが理解できた。

授業後の調査で，生徒全員が自分の思考が深まったと感じた。正解のない問いに対して，グループで多面的に話し合うことで，自分の中にある知識＝スポーツの価値やその意義を問い直し，スポーツに対する新たな視点や考え方を見いだせた。そして，そのことがとても楽しかったと答えた。「今後どのようにスポーツをしていきたいか」という問いには，運動が苦手と感じている生徒も含め，ほとんどの生徒が「自分への挑戦」として，あるいは「スポーツを通したコミュニケーション」を楽しむためにスポーツをしていきたいと答えた。オリンピック・パラリンピックの対立的テーマについて多面的・批判的に話し合うことを通して，生徒自身のスポーツへの関わり方を考えることにつながった。

〈参考文献〉

１）国際オリンピック委員会（2019）オリンピック憲章. https://www.joc.or.jp/olympism/charter/pdf/olympiccharter2019.pdf

２）国際パラリンピック委員会（2018）公認教材 I'mPOSSIBLE.

３）国際パラリンピック委員会（2013）ｱｸｾｼﾋﾞﾘﾃｨｶﾞｲﾄﾞ. https://www.jsad.or.jp/paralympic/what/pdf/ipc_accessibility_guide_ja2.pdf

４）子安　潤（2018）資質・能力と教材研究ベースの配置転換．体育科教育．第 66 巻第８号．pp.12-15

５）小山吉明（2016）体育で学校を変えたい～中学校保健体授業の創造～．創文規格，pp.205-217

６）オリンピック・パラリンピック教育に関する有識者会議（2016）オリンピック・パラリンピック教育の推進に向けて　最終報告. https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/shingi/004_index/toushin/__icsFiles/afieldfile/2016/07/29/1375094_01.pdf

７）Panasonic（2019）オリンピックとパラリンピックを題材とした教育プログラム　ティーチャーズガイド